

『類題 大家発句集』について

御厨 直柔

『大家発句集』とは、安政 3（1856）年に刊行され、明治に再刊された類題句集である。江戸時代後期、天保以後から正岡子規の俳句革新が起こる前の明治の「旧派」までの俳諧は正岡子規によって「卑俗陳腐」と評され、月並俳句と呼ばれている。俳諧研究においては芭蕉以前や正岡子規によって生まれた「新派」が注目され、月並俳句と呼ばれる時代のものは研究が進んでいない。既になされた研究も月並俳諧を対象としたものが多く、個々の類題句集を対象としたものは殆どない。しかし、当時多くの人々が自ら創作に関わり、鑑賞した文芸であり、文化資料としては価値を持つといえる。当時の俳諧文化・庶民文化を反映した資料として『大家発句集』を取り上げ、その全体像を明らかにすることを目的とする。

本研究では綿拔が所蔵する『大家発句集』を対象として、収録題目や人名録に載っている俳人をまとめあげ、分析することで考察を行う。調査の過程で分かった誤字脱字といった事項も別途まとめた。

『大家発句集』は題言、附言、目次、本文、人名録、跋、刊記、広告で構成されていた。本文は太陰暦により季節ごとに「春之部」「夏之部」「秋之部」「冬之部」に分かれている。「春之部」では 187 題 587 句、「夏之部」では 159 題 525 句、「秋之部」では 155 題 557 句、「冬之部」では 134 題 478 句が詠まれている。しかし「冬之部」には落丁があるため、他の機関における所蔵を見つけて補足を行う必要がある。

今回の調査では、『類題 大家発句集』の内容が明らかになった。しかし今回は題目の比較検討を行えた資料が少なく、明治のものも含んだ。『大家発句集』の題目が他の類題集に含まれているかという点に着目した比較検討のため、明治以降にしかない題目の影響はないが、文明開化や改暦による文化の差異という点を考慮すると、明治以前と以後で比較検討できるだけの類題句集の分析データが増えることが望まれる。今後は各機関の所蔵する諸本調査を行い、『大家発句集』含め、天保以後明治の旧派まで数多く出版された月並俳諧の類題句集を同時代同士のもので比較検討を行うことでより正確に特徴をつかみ、当時の俳人たちの興味の変遷を知ることができる。

（指導教員 綿拔豊昭）